福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136　東京都江東区
夢の島３－２
都立第五福竜丸展示館内
電話　03-(3)521-8494

私の、忘れてはならない原点

高橋清祐

私は、劇団民芸の演出文芸部に所属し、そこで仕事をし、三十五年になる。勿論、芸術一般がそうである様に経済的には恵まれず、将来の保障は皆無に等しい。現在の「金」が総ての尺度を決定する世の中では、まるで間尺に合わない。演劇の役割は、簡潔にいえば人間とは、社会とは斯くあるべきだと考え、その発展と幸福を示唆するものである。私はその舞台のひとつひとつに参加することによって、自分が人間的に成長して行くのを実感した。仕事が人間的成長の喜びを与えてくれる、こんなことはそうざらにあるものじゃない――これが三十五年続けて来た理由。

そんな自分に去年、事件がおきた。今から二十六年も前に初演された舞台の再演が決まり、それに参加することになり、改めて戯曲を読み直した時のことだ。『泰山木の木の下で』は、広島の被爆者達が主な主人公だ。彼等「庶民」は、人間の原罪ともいわれるべき大きなハンデを背負され生きている。にもかかわらず彼等は、社会が作った枠組にまどわされることなく、自分が正しいと思ったことを貫き通そうとする。そこには、庶民だけが持ち得る、決して失なってはならない人間本来の生き方があったのだ。その時、受けた「衝撃」が「事件」なのだ。それは、世の中の、年月の流れに気付かぬ内に流れ、風化してしまっている自分自身が否応なく発見されたからである。原爆に対して、人間の生き方に対しての関りが鈍化してしまっていることを突きつけられたからである。

人は自分では意図せずとも流され漂って行ってしまうものかも知れない。問題なのは、それに気付き、現在どこにいるかを知ることである。その意味でこの戯曲は、私にとって決して忘れてはならない、原点なのだと思う。

現在、私は「にっかつ撮影所」内にある養成所で俳優を志す若者達を教えている。二年間の修業を終えて最後の卒業公演を迎えようとしている。彼等の出て行く社会は、混沌として、出口も見えず、一条の光もさし込まない暗闇に包まれている様に私には思える。その中では自分を見失い、本当の姿を忘れかねない。そんな彼等に、少しでも役立つ様な、「原点」に成り得る様な贈り物はないかと思案し、一九五九年、劇団で上演した、原源一作『漁港』を取り上げることに決めた。

このドラマは「第五福竜丸」が焼津港に帰港したところから幕が開く。作者は、焼津に行き、綿密な取材をして書いた。それは、全く許しがたい、理不尽な水爆実験が、直接の被爆者―乗組員―のみならず人々から何を奪い去り、それにどう抵抗したかを克明に画き切ったものである。若者達は今、悪戦苦闘をしている。それは想像を遥かに越える被害者達を我れと我が身を使って生きなければならないからである。その成果は決して十全とはいえないものであろう事は想像出来る。けれどこれからの「人生」に「原点」としての痕跡が残ればと期待して指導している。

稽古に入る前に夢の島に行った。「第五福竜丸」はそこにいた。私には少し淋しそうに思えた。しかし、暖かそうな木の船体を暫く眺めているうちに、この船がどんな運命を経て今、ここにいるのか問い掛けて来る様に思えた。「原点」!!ここに在ってくれて良かった!。

（劇団民芸・演出家）

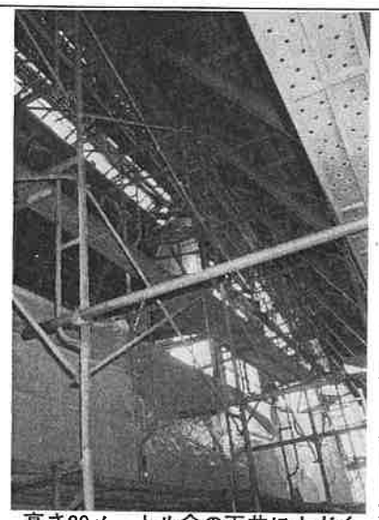
展示館の修理工事すすむ
縦横に足場、鉄サビの降る中で

一月十日から本格的に始まった展示館の修理工事は、いま、厳寒の中で着々と進められています。展示物の撤収・保管、船体の被覆・養生の後、館内全体の足場組みが始まり、およそ一週間で、約二十メートルの天井に届くように、縦横に鉄パイプと鉄板による足場が組まれました。

使った鉄板は長さ四メートルのもの約八百枚。天井の梁から鎖で吊り下げられたものもあり、さながらジャングルジムの景観です。硬質ウレタンの断熱材の張り替えや、梁の塵埃の撤去、天井採光ガラスの取り替えなどの作業のためですが、垂れ下った断熱材を今度は完全に剥がす作業が難問題。防塵マスクをつけても「フィルターは半日で真っ黒」と作業の職人さんがこぼす程に、鉄さびのチリが充満します。

「サンダーをかけてのさび落としとなればこの何十倍、すごいのはこれからですよ。足場を組んではじめてわかった傷みも相当あります。外からもブームリフターでよじ昇らなければなりません。日曜日返上でやります」と工事を担当する升川建設の滝口監督はいいます。

一枚一枚大きさの違う断熱材の再貼付も二千枚近く、それぞれ実測し、足場の上でロールを切断しながら行なうとかで、三月八日終了予定まで難工事の連続です。



高さ20メートル余の天井にとどくように足場が組まれた

展示館前にプレハブの事務所
来館者も外で説明に耳を傾けて

休館中も協会の業務は展示館前のプレハブの事務所で続けられていますが、問い合わせの電話や見学の申込が続いています。

休館になった翌日の十一日には墨田区の吾妻小学校四年生の五十人が来館し、久保山記念碑前で先生から説明を聞き、全員で碑の言葉を朗読しました。休館と知らずに訪れる人も多く、がんばってとの激励もあります。二月六日には、毎年来館する埼玉県川口市の安行小学校の六年生が来館、記念碑に折鶴を贈って、「想像力を働かせて船を見つめ話し合おう」と熱心に説明に耳を傾けました。

二月十二日には、日本山妙法寺の平和行進が久保山記念碑に合掌の後、焼津にむけ出発しました。

太平洋から熱いメッセージ

ビキニ水爆実験の被災者を追い続けているフォトジャーナリスト島田興生さんが、一月二十日、テレビ朝日の『住めば地球』に出演し、太平洋から熱いメッセージを送りました。「撮り続けねば」の思いでマーシャルのマジュロ島に移り住んで六年。取材の動機からマジュロでの生活、自然、被爆者の実相と、その三十七年の軌跡を語りました。

「私たちのために一生懸命やってくれる、同じ気持ちが通じあえてうれしい」と語る元ロンゲラップ村長のジョン・アンジャインさん。十五年前の写真集『ビキニ』の撮影以来、再び会った被爆者にカメラをむける島田さんと、年老いたその被爆者夫妻の姿が強い印象を残しました。

協会、九十九回理事会ひらく

一月十九日、協会の第九十九回理事会が学士会館で開かれました。理事・監事の全員が出席し、十一月、十二月の理事会に引き続き、理事の補充と新しい会長の選出について審議を重ねました。二月九日に評議員会を開き、理事・監事の改選を行い、直後の理事会で新しい会長を選出することになりました。三・一ビキニ事件記念集会の日程についても決定し、二月二十八日（木曜日）午後六時半から文京区民センターで協会主催で開催、講演者は、村野賢哉氏（東海大学文明研究所教授）、岡野真治氏（放射線影響協会参与）の二人となりました。

十五年戦争期における焼津市の漁業（一）

高橋鑛逸

四方海に囲まれた我が国において、古くから食文化の蛋白源をこの海洋に求めてきた。

この海洋資源確保は百％船が必要であるのは言うまでもない。しかし約五十年前の戦争中（一九三一年～一九四五年）これら海洋漁船はどのような道をたどったのであろうか。

四六年前、日本の敗戦という結果で第二次世界大戦は終了した。一九三八年四月当時の帝国議会は『国家総動員法』という法律を成立させ、あらゆる物資、動力、国民までも戦争に駆り出せるという権限を政府に与えた。これによって政府は「国家の総力を挙げて聖戦を完遂する」という大義名分をもって、戦時中漁船や漁船員を大量に徴用しこの戦争に参加させたのである。

『焼津水産史』は当時の漁業者の様子を、八月一五日（一九四五年）を中心とした水産業者の項のなかで、「その頃の水産業者（魚商人）の生活と言えば、扱う魚が皆無といってよい状態だったから、魚以外に職を求め働く以外になかった。徴用の対象ともならない老朽船や小船による沿岸での操業さえ、戦争末期には不可能であった。米軍機が駿河湾を飛び交い、機銃掃射を加えるから危険で出漁も出来なくなっていた。青壮年男子のほとんどが徴兵され、或は軍需産業・船舶に徴用されており、残る者は未成年、初老の人達をも加えて何らかの戦争遂行上有益な仕事に着くということであった」と記し、さらに「その間の（戦争中）、そして戦後復興するまでの水産業者の生活といえば、悲惨の一語につきる。無論この戦争は国家総力戦だったから、ほとんど総ての国民が大同小異の辛苦をなめるのであるが、水産業者のそれは最も厳しい業種の一であったと言ってよい。その最大の理由は漁船の全面的な徴用によって取り扱うべき魚そのものが、焼津の浜から殆ど姿を消してしまった事にあり――」と書いているごとく、今次十五年戦争には戦地に赴いた人々のほか、内地で戦争遂行に駆り出された人々がいかに苦労を強いられたかがよくわかる。

いったいこの戦争期に焼津港に所属していた漁船が何隻位徴用されたのであろうか、『焼津漁業史』による「年次別徴用船」によれば、

一九三八年（昭和一三年）二二隻
一九四〇年（昭和一五年）二四隻
一九四一年（昭和一六年）一二隻
一九四二年（昭和一七年）　六隻
一九四三年（昭和一八年）一六隻
一九四四年（昭和一九年）　九隻
一九四五年（昭和二〇年）　一隻
計　九〇隻

一九三九年（昭和一四年）については資料がなく、このほかメモだけとして、一九三七年（昭和一二年）四隻が徴用されている（市内小川漁港を含む）。当時の全国的水産団体である帝国水産会編『魚市場ニ関スル調査』によれば一九三七年の焼津港漁船数は、鰹鮪船五〇隻、鯖船四三隻、計九三隻（全部動力付き）とあり、遠洋漁船は全船が徴用されている。漁船とこれに伴い漁船員の徴用も同じに行われている。

これら徴用漁船は陸・海軍の軍用船として、本土沿岸や占領地の沿岸警備、食糧・弾薬等の輸送が主な任務と考えられているが、この他太平洋上で敵機動部隊の哨戒や、南方ラバウル・セレベス・ジャワ方面の軍事基地を根拠地として、一定期間漁業に従事し南方海軍部隊へ生鮮魚類の提供をおこないながら哨戒作戦に従事していた漁船もあり（南遣鰹鮪漁船隊）、農林省が中心となり南鳥島付近で漁獲をしながら哨戒し、魚は農林省で買い上げるという農林徴用なども あった。

戦争が終わり戦後焼津港に帰還した漁船は『焼津市誌』によれば、一七隻と記録されている。

戦後連合軍の占領期には、船舶の航行が制限され、漁船の海岸での操業が、当初木造船のみ沿岸一二哩以内の漁獲が許されるだけとなり、逐次拡大されてはきたものの完全漁区制限撤廃になったのは一九五二年の対日講和条約発効の前日のことであった。〈以下次号〉

（静岡県近代史研究会会員）

潮の香に導かれて…

津田櫓冬

「浚渫工事が始まると、瓦が手に入らなくなります…」と広島の佐伯敏子さんから連絡を受けて、せっぱつまった気持に追い込まれ、何人かの仲間達と広島にやってきたのは、一九八一年十一月八日の事でした。

十三人の親族を原爆で亡くされ、自身も二次被爆された佐伯さんの案内で、長靴をはき、スコップ、クワ、タワシの出で立ちで、平和公園横の川岸に立ちました。午前中は正午過ぎをピークに潮が満ちていく元安川は、あます程の水量をたたえていました。午後の二時半頃には引き潮で様子が一変、流れは急ぎ足になり、川幅はせばまり、両岸に、黒い帯状の川床が姿を露わにしてきました。

石段を降りきって身を低くかがめ、黒い泥土にしっかりと埋まった瓦を、力をこめて起こし一息ついた時、思いがけない感慨がわき起こりました。ぼくはしばらく、日本海の海辺で過ごしてきた子ども時代に、すっかり引き戻されたような懐かしい気分に浸ってしまいました。原爆で被爆した瓦を掘りにきているのに、これは不逞で場違いな感興ではと自問しますが無力な試みでした。

元安川の川床は、海の潮の香を放ち、ぼくの全身を心地よく包みました。掘り起こした瓦や石の下は、ゴカイやヤドカリや小さなカニ達の住処でした。

不作法で、不意の訪問者に素早い反応を示した後、こちらの動きに備えて、じっと様子を伺うカニと対峙していると、このカニ達も、ゴカイも、被爆した瓦にぴったりくっついたフジツボも、かつて、ここで何が起きたかを、その一部始終を知っていて語りかけてくるようでもありました。

川床の泥をスボンにはね上げて、瓦や陶製の学生ボタンを見付けて歩きながら、いつかぼくは、あの日のつきない様相の端っこのところを、めくるめく想いで、触れることが出来たように思いました。

八月六日の八時十五分のあの時刻は、満潮の二時間後だったとすると、潮位はどの位あったろう…。熱線の熱さと痛みから、この元安川に逃れた人々は、この川の水がしょっぱいとわかっていても、焼け付く咽の渇きを癒さざるを得なかったのだ……。

ためらわずに出かけたつもりの元安川でしたが、岸に立った時は、既にぼくの不遜さは打砕かれていて、内心、怯みと緊張感でこわばっていました。それを解きほぐして、元安川への橋渡しをしてくれたものは、子どもの頃の原体験を呼び覚ました潮の香であり、干潟の生き物達でした。

次の年の夏、ぼくにとってもう一つの原体験を呼び覚ます機会を、再び潮の香と、木造船の第五福竜丸によって与えて貰う事になりました。展示館に納められている第五福竜丸は、船腹の曲線と外板の並びに、機能美と手づくりの暖かみを留めながら、あまりに多くの事を一身に引き受けている様子が痛々しくみえました。

傍に近づき、外板に手をあてようとして、船にしみ込んだ海の匂いを嗅ぎとったぼくは、たちまち郷里の丹後半島の、西の付け根にある入江にとんでいました。

敗戦後間もなく、遊び盛りの小学生だったぼくは、夏になると近所の友達と毎日のように目と鼻の先の海に繰り出していました。木製の漁船の舳先や舷や機関室や船長室の屋根から飛び込んだり、木の桟橋から出漁していく船の後に身体を投げて、スクリューが巻き起こす渦巻きに翻弄されるスリルに嬉々としました。すぐ沖合に水をためて半分沈みかかった大きな廃船は特筆もので、子ども一人寄りかかるだけで大きく傾くその手ごたえに、ぼくらは生きる喜びを預けていました。疲れて冷えた体を伏せると、夏の陽ざしで焼けた甲板は皮膚になじみ、海水のしずくを吸い込んで代りに年経た木の香で応えてくれました。

ぼくは展示館の中で、今度は一四〇・八六トンの木造船からの、投射のお返しを待つのでした。

（画家）